

地域資源としての産業遺産の活用

研究員 上代庸平



時代の変遷に伴う産業構造の変化によって、地域経済を支えてきた産業基盤はその役割を終え、産業遺構として残されることとなります。多くの場合、産業構造の変化に直面した地域は、その代替経済を必要とするため、地域の持続可能性を目的とした産業遺構の経済的活用が試みられます。

このような地域資源の活用手法に関する学術的な研究は、1980年代にドイツで始まっています。国内炭田の斜陽化や技術革新に伴う産業基盤の高度集約化の中で、ドイツの産業立国としての文化をいかに継承し、かつ、経済的効用や雇用をいかに生み出すかが、喫緊の課題として検討されたのです。

ドイツ帝国時代から現代まで鉱業・機械及び光学工業を擁して繁栄してきたザクセン州は、州内の産業遺構を保存し活用するための目的連合を設立し、積極的な取り組みを行っています。ケムニッツ市にあるザクセン産業博物館は、コロナ禍前の2018年には100万人以上の来館者があり、重要な地域資源としての地位を占めます。この博物館は、州内の石炭産業の発展や旧東ドイツ時代の自動車・コンピュータ技術の進展

など輝かしい面のみならず、ソ連によるデモンタージュ、共産主義の下での強制国有化、環境汚染など負の側面にも目を向けつつ、医化学工業・自動車産業の集積地としての同州の現状と未来を示す展示を行っています。このような地域資源としての華々しい存在価値にもかかわらず、同博物館の経費約281万ユーロのうち自己収入で賄えるのは35万ユーロに留まり、その他の経費は州や自治体、欧州連合の補助金に頼っているのが現状です。それでも、過去のしあわせの記憶を保存し、将来における地域の持続可能性を担保するために、いかに産業遺構を活用していくかの議論を経て、教育効果や地域経済への波及効果といった目に見えにくい効果への考慮も含め、活用のための営みが続けられています。

地域のしあわせの記録としての産業遺構の継承と創造のためにいかなる条件が必要なのか、このような先進例を参考にして、更に検討を深めて行きたいと思います。



ザクセン産業博物館展示棟（ケムニッツ市）。この建物自体も蒸気駆動機械工場の跡地であり、ザクセン州の産業文化財となっている。欧州産業遺産の道（ERIH）のアンカーポイントにもなっており、周辺地域や州内の他の産業遺産の位置付けや連関性をも理解できるように、展示内容が工夫されている。2023年3月撮影。